

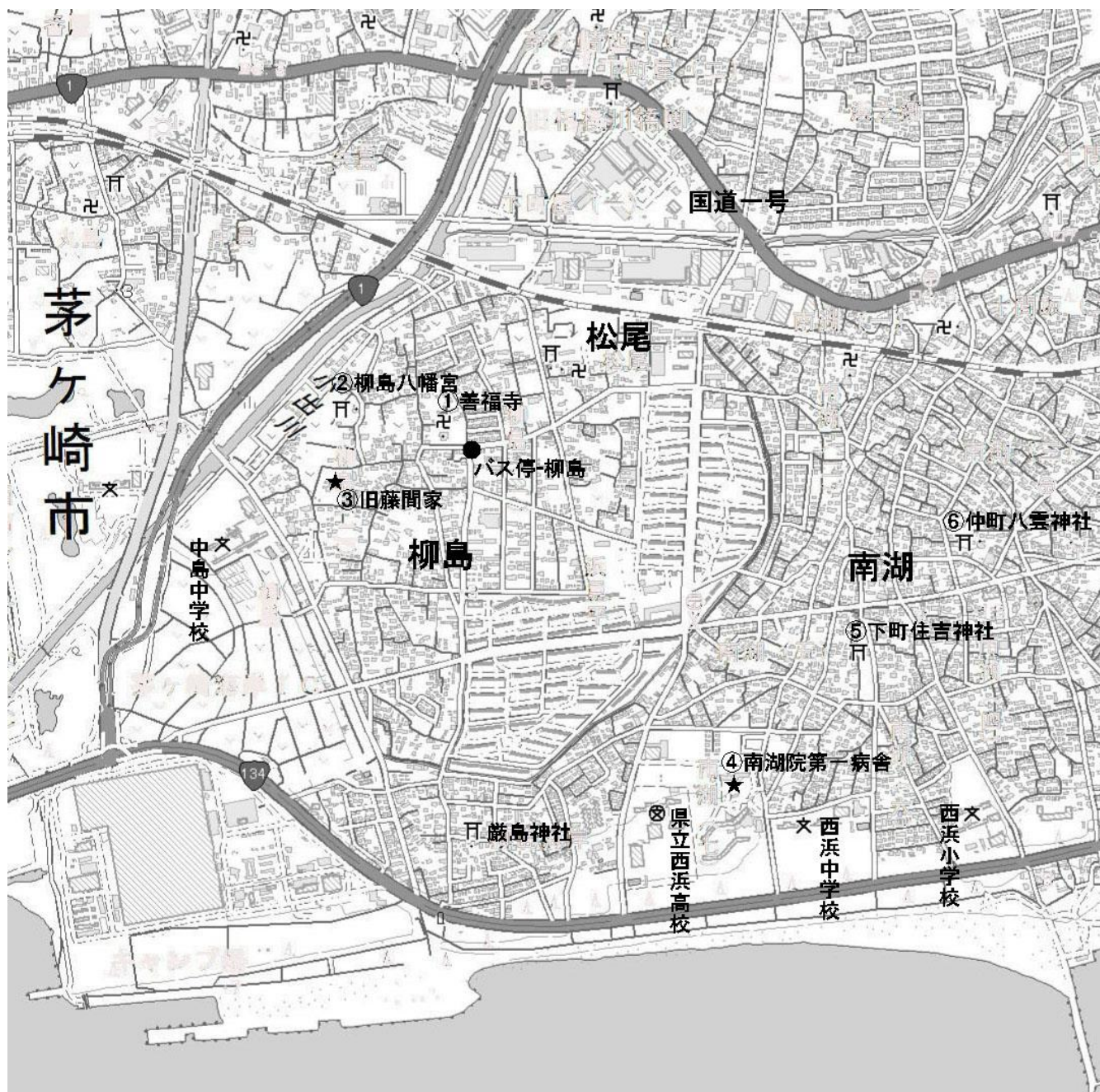
市内 柳島から南湖コース編

主催 茅ヶ崎郷土会

後援 茅ヶ崎市教育委員会

日時 2020年1月25日(土)

行程



〈連絡〉 山本俊雄 090-6174-2806 尾高忠昭 090-3241-0775 平野文明 090-8173-8845

会員募集中

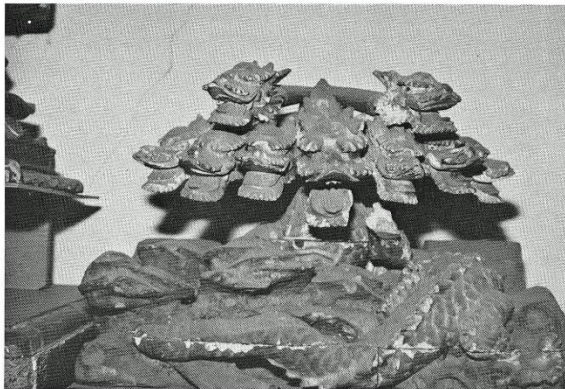
8時50分 茅ヶ崎駅南口 バス停1番乗り場集合
 9時25分 全体の集合 **柳島善福寺** 9時25分～9時50分
 ・出席者受付・挨拶など・見学 (30分間) 善福寺発9時50分
 ・移動 (5分間)
 9時55分 **柳島八幡宮** 着
 ・見学 (15分間) 9時55分～10時10分
 10時10分 柳島八幡宮発
 ・移動 (5分間)
 10時15分 **旧藤間家住宅** 着
 ・見学 (15分間) 10時15分～10時30分
 10時30分 旧藤間家住宅発
 ・移動 (40分間)
 11時10分 **旧南湖院第一病舎** 着
 ・見学 (15分間) 11時10分～11時25分
 11時25分 旧南湖院第一病舎発
 ・移動 (10分間)
 11時35分 **下町住吉神社** 着
 ・見学 (15分間) 11時35分～11時50分
 11時50分 下町住吉神社発
 ・移動 (15分間)
 12時05分 **仲町八雲神社** 着
 ・見学 (15分間) 12時05分～12時20分
 12時20分 仲町八雲神社 解散
 (えぼし号 バス停「⑩南湖会館」12時26分乗車で駅南口へ)

柳島村と関東大震災

市史ブックレット6『茅ヶ崎の歴史遺産』には「折れた鳥居」として、関東大震災での被害についてかかっている。それによると、当時の茅ヶ崎町は人口約2万人で、罹災した家屋は全壊2112戸を含み4474戸、死亡156人重傷61人に及んだ。市内にはこうした被災者を慰霊する記念碑・供養塔が三島神社、海前寺など9か所ある。最も被害が大きかったのは柳島地区で、当時世帯数161戸のほとんどが倒壊し残ったのはわずか3軒であったという

善福寺の木造九頭竜像(下記の出典には八大龍王としてある)

茅ヶ崎郷土会編『ふるさとの寺と仏像』(昭和52年刊行)より



八大竜王 高 18cm 巾 30cm

① 柳島山寶龜院善福寺 (高野山真

言宗) 柳島1-3-28

本尊 阿弥陀如来

木造九頭竜像

龍族の代表である(1)難陀(ナンダ)、(2)跋難陀(ウパナンダ)、(3)沙伽羅(サガラ)、(4)和脩吉(ヴァスキ)、(5)徳叉迦(タクサカ)、(6)阿那婆達多(アナバタッタ)、(7)摩那斯(マナスビン)、(8)憂鉢羅(ウッパラカ)を八大龍王という。それぞれ歡喜、賢喜、請雨、宝有、現毒、無熱、大力、青

蓮華を表し、護法神である。この中の(4)和脩吉は九つの頭を持ち、九頭竜と言われる。茅ヶ崎では、八大龍王は豊漁をもたらすものとして漁業にたずさわる人たちによって祭られ、柳島から小和田に掛けての海岸に、石造の碑が6基祭られている。

境内の石仏など

『資料館叢書 13 茅ヶ崎の石仏 1—鶴嶺地区』(茅ヶ崎市文化資料館 2015 年刊) より。

阿弥陀如来立像 種子キリーク (阿弥陀如来)

念佛講同行中相州柳島□□□譽/阿弥陀如来者念佛□中大□願/承應三(1654) 甲午年十月十六日敬白

六地藏 右から1体目に「□和元年」、2体目に「享和元年(1801)」、5体目に「享保元年(1716)」、6体目に「享保元年(1716)」とある。

護摩供養塔 種子カーンマーン (不動明王)

當院現住圓海代立之/峯文政十三(1830) 寅年八月日/八千枚護摩供養之塔/南湖村施主青木助左衛門/産所當村石井作右エ門叔父

弘法大師坐像 2基 共に年銘はない。以下は鵜沼を語る会のHP「相模準四国八十八ヶ所」より引用。

鵜沼の浅場太郎右衛門が文政3~4(1820-21)年に鎌倉・高座郡内に四国札所を模して作った。

向かって右 相模国準四国八十八ヶ所第38番善福寺

“ふくかぜになびく柳のみどりより なほしたわるのりの恵みは”

(本四国38番蹉跎山補陀落院金剛福寺本尊は三面千手観音：高知県土佐清水市足摺岬)

向かって左 同八十八ヶ所39番地藏院

“うちなびき春はみどりの柳島 夏はずしきかげとこそしれ”

(本誌国39番赤亀山寺山院延光寺 本尊薬師如来：高知県宿毛市)

② 柳島八幡宮 (柳島 2-3-10) (神奈川県宗教法人名簿では「八幡宮」)

八幡宮の境内にある説明板に次のように書いてある。

現在の祭神は誉田別尊(ホムタワケノミコト)、応神天皇である。

文政5年(1822) 関東大震災時に倒れた鳥居が造られた。(鳥居の年銘による)

天保12年(1841) 『新編相模国風土記稿』によると、「十羅刹女社 鎮守なり」とある。(十羅刹女とは、鬼子母神と共に「法華経」の信仰者を擁護する十人の鬼神女のこと)。

嘉永元年(1848) 柳島の鎮守として、鎌倉郡邸岡郷高谷村(現在藤沢市内)の大工文蔵が、総工費29両で受け、た。同年11月15日に竣工する。(藤間家資料による)

大正12年(1923)9月1日 関東大震災のため全壊する。

大正15年(1926) 当時の区長の片野荘太郎は、神社総代と図り、村民の総意を得て全社殿と鳥居の再建を決めた。大工は地元の石井金寿、宮大工は愛甲郡相川町半原の矢内匠家に依頼し、倒壊前の姿に竣工する。

昭和20年(1945)7月16日 太平洋戦争の平塚空襲の際に火災にあって全焼する。

昭和24年(1949) 千葉県市川市行徳関ヶ島の神輿・堂宮師の後藤直光により、神輿を新調する。

昭和32年(1957)11月23日 氏子をはじめ多くの寄付を得て、社殿を建立する。

大工は石井幸三郎・府川篤、木彫師は江口裕康など。

昭和50年(1975)5月4日 奥殿を再建する。大工は石井幸三郎・府川篤など、鳶職は山口道雄など。現在に至る。平成30年3月吉日 柳島自治会 柳島八幡宮

社殿の彫刻

神功皇后と誉田別命・武内宿禰(参考文献 平野文明「神功皇后の新羅侵攻」—茅ヶ崎市文化資料館刊『石仏調査ニュース 茅ヶ崎の石仏』18号 2014年9月発行所載)

境内の石仏など (資料館叢書 13 『茅ヶ崎の石仏1—鶴嶺地区』より)

双体道祖神(1) 文化三(1806)丙寅八月吉日／願主 今澤氏

双体道祖神(2) 昭和六十年十二月吉日／台石施工記念として寄贈／三橋石材店

石燈籠奉納碑 元禄十五年 (1702)

庚申塔(1) 種子バン (大日)・ア ()・ウン (青面金剛カ?)

万治三年(1660)相州柳嶋村施主／啓白

厥庚申者半夜凌睡眠離生死當夜／如等所行是菩薩道漸々修覺悉當成佛／

□□善男善女集数年庚申奉 (三猿)

子二月吉日 本願善福寺隆真 (善福寺二代 寛文12年 1672 『柳島の移り変わり』 p20)

庚申塔(2) 享保十八年(1733)癸丑三月吉祥日

種子ウン (青面金剛) 庚申供養 (三猿)／江戸 願主 木目田幸八

庚申塔(3) (六臂青面金剛像 三猿)

基礎正面に10人の名前と、左側面に「講中間[]／十人[]／元文五(1740)庚申[]／正月十[]」

狛犬 平成30年9月造立。以前のものは昭和32年(1957)建立だった。

関東大震災で破損した鳥居の柱

柱1にある世話人4人の中に「藤間善左衛門」と、柱6に「文政五年(1822)午四月十五日建之」とある。善五郎(柳庵)の父善左衛門は天保8年(1837)没で、この鳥居が建てられた文政五年には存命していた。一方、善五郎は享和元年(1801)うまれで、この年には21歳だった。

境内の記念碑 資料館叢書 10 塩原富雄著『茅ヶ崎の記念碑』(1991年市文化資料館刊)より

柳島八幡宮復興の碑 碑に建立の年次は刻されていないが、文中に次のように記されている。

昭和廿年七月十六日 戦災禍ニ祖国守護ノ犠牲トナルヲ…

昭和廿二年五月ニ拝殿ヲ竣工…

同廿三年四月ニ神楽殿ヲ造立…

同廿四年五月ニハ豪華ナル神輿ヲモ新調セリ…

藤間柳庵之碑 神奈川県知事 長洲一二

藤間善五郎翁は享和元年(一八〇一)相模国高座郡柳島村に生まれ、青潭と号した柳庵と称した。翁は多年柳島村名主役を勤めて村政に尽力し村の繁栄をはかった。一方家業の農業と廻船業を隆盛にして物資流通の重要な中継地柳島湊を中心とする近郷の経済的發展に貢献した。また傍ら学問に志して多くの詩文句歌記録を留めとりわけ雨窓雑書十編 太平年表録七編 年中公触録七編等は翁の流麗な書風をもってその学芸の一端を示すとともに明治維新期の激動する世相を活写して後世に遺した。翁は郷土の卓越した指導者でありまた当時の地域文化の一高峰であった。明治十六年(一八八三)翁は八十一歳で柳島村に没した。昭和五十五年神奈川県は翁を歴史上の人物「神奈川の百人」のうちに選んだ。いま翁の没後百年にあたりその遺徳を敬慕する者、相はかりここに碑を建て翁の事蹟を顕彰して永く後世に伝えるものである。

昭和五十八年十一月 川城三千雄文 茅村 水越咲七書

(裏面に) 昭和五十八年(一九八三)十一月建之

柳庵顕彰碑建設委員会 有志一同 石工 三橋石材店

③ 民俗資料館 旧藤間家住宅 柳島2-6-30

昭和7年(1932)藤間家住宅建設される

平成25年(2013)3月「藤間家(近世商家)屋敷跡」として市の史跡指定

平成26年(2014)屋敷林を市の保存樹林に指定

平成27年(2015)3月26日 国の登録有形文化財に指定

平成 29 年(2017)7 月 敷地 3,898 平方メートルと住宅などが茅ヶ崎市に寄贈

平成 30 年(2018)4 月 13 日 民俗資料館 旧藤間家住宅として一般に公開

茅ヶ崎市教育委員会発行のちがさき丸ごとふるさと発見博物館ガイドブック『ぶらり散歩郷土再発見』(45 頁から)によると、藤間家は江戸時代に柳島村の名主で廻船問屋だったとある。広大な屋敷の中に、平成 27 年 3 月に国登録有形文化財となった主屋や伝来の民俗資料を展示した「藤間資料室」などの建物がある。資料室は郷土史家でもあった 17 代当主の善一郎氏が昭和 34 年に設置し、同家に伝わった家具・調度品を中心に、柳島湊に関する古文書や道具類などを多数保存され、子の雄蔵氏に引き継がれて公開されてきた。

藤間家 13 代といわれる藤間柳庵は本名を善五郎といい、享和元年(1801)に生まれた。9 歳の頃から書を習い、読書を好んだ父の影響を受けて 11 歳から学問を始め、江戸に出て学んだという。書家秦星池に学んだ。書は、その見事な筆跡が彼の記した『家脈甲祭記』『雨窓雑書』『太平年表録』などに残されている。名主としての公務を務めたほか、家業の廻船業では観音丸・不動丸などを所有し、江戸を主として様々な地域への物資運搬事業で活躍した。明治 16 年(1883)永眠。昭和 55 年に「かながわの 100 人」に選ばれている。柳庵の墓は柳島の善福寺に、また顕彰碑「藤間柳庵の碑(昭和 58 年建立)が柳島八幡神社境内にある。藤間家の玄関脇には柳庵の家訓碑「身代は預かりものと心得て先ず富やすよりへらさぬがよし」(安政 4 年:1857)がある。屋敷地内には、これらの建物や資料などの他、地中にも土蔵跡など藤間家の歴史が埋蔵されていることが確認されたため、市は平成 25 年 3 月に「藤間家(近世商家)屋敷跡」として史跡指定した他、平成 26 年には屋敷林を保存樹林に指定した。晩年には藤間柳庵を歴史的人物として研究を進めた藤間雄蔵氏は平成 28 年に亡くなったが、本人の強い遺志により平成 29 年 7 月に建物を含む屋敷地約 3900 m²が市に寄付された。

④ 旧南湖院第一病舎(竹子室) 茅ヶ崎市南湖七丁目 12869-201

明治 31 年(1898) 高田畊安、茅ヶ崎駅が開業した時に南湖に土地を求め、翌年に南湖院を開設

明治 32 年(1899)9 月 第一病舎新築竣工

昭和 20 年(1945) 高田畊安死去 海軍による接收

平成 27 年(2015)12 月 10 日に市に寄贈

『ぶらり散歩郷土再発見』の「南湖院と高田畊安」の項に、次のように記してある。

西浜高校、有料老人ホーム茅ヶ崎太陽の郷の辺り一帯には、かつて東洋一の設備と規模とうたわれた結核療養所南湖院がありました。現在は、第一病舎が国の登録有形文化財になっています。

南湖院は、医師高田畊安(1861~1945)が開設しました。畊安は京都府加佐郡中筋村(現・舞鶴市)で生まれ明治 29 年(1896)東京の神田鈴木町に東洋内科医院を開業しました。新島襄に師事してキリスト教の洗礼を受け、明治 25 年(1892)には勝海舟の孫娘にあたる疋田輝子と結婚しています。結核で兄を失い、自分も同じ病気で転地療養をした体験から、結核の治療に生涯をかけました。明治 31 年(1898)茅ヶ崎駅が開業した時に南湖に土地を求め、翌年に南湖院を開設しました。開院以来、順次拡大整備され、最盛時は約四万坪とも五万坪とも言われる敷地に、多くの患者がいたと言われます。療養生活を送った人々の中には、国木田独歩など多くの著名人がいます。

⑤ 南湖下町 住吉神社 南湖 5-5-1

『新編相模国風土記稿』茅ヶ崎村の項に「十羅刹女堂」と記されている。

茅ヶ崎市史史料集第3集『茅ヶ崎地誌集成』（平成12年茅ヶ崎市刊）に収録の『生活の凝視と学校経営』（抄）一昭和3年編集一の住吉神社の項に次のように記されている。

下町にある。祭神は表筒男命・中筒男命・底筒男命の三柱の神である。由緒は詳らかでないが祭神は何れも海路の神といわれているから漁村鎮護の神として祀られたものであろう、今日兵庫県（ママ）に官幣大社住吉神社がある。祭神はやはり前にあげた三神を祀ってある。その由緒は極めて古くかつて神功皇后が三韓を征服せられた時屢々神祇を親祭せられ、凱旋の後報賽の礼を致すため、まず海路の神を摂津の住吉の地に祀られた。これが即ち住吉神社の縁起である。

当社の境内は553坪、3月3日が祭典である。俗に産土様（うぶすな様）と呼ばれて氏子の尊崇が厚い。

社殿の彫刻

彫刻の絵柄が、何を表しているかについて、次の二つの見方が考えられる。

①古事記・日本書紀にある海神ワタツミとその子、トヨタマヒメとタマヨリヒメの姉妹と見る見方。

ニニギ・(妻) コノハナサクヤヒメ →ヒコホホデミ (山幸彦)・(妻) トヨタマヒメ →ウガヤフキアエズ・(妻) タマヨリヒメ (妹) →カムヤマトイワレコ (神武天皇)

②南の大海に住む娑竭羅竜王（シャガラリュウオウ）及び龍王に、旱珠（かんじゅ）と満珠（まんじゅ）を借りて赴いたアズミノイソラと神功皇后の妹のトヨヒメと見る見方。

参考文献 『郷土ちがさき』139号（2017年5月刊）所収の平野文明「社殿彫刻報告（その7）アズミノイソラ—南湖下町住吉神社—」

境内の石仏など（資料館叢書14『茅ヶ崎の石仏2茅ヶ崎地区』2018年刊より）

双体道祖神 嘉永6年(1853)

八大龍王神の碑 慶応□年(1865~68) 平成24年に南湖4丁目の海岸から移設された。

八大龍王の石祠 年銘なし 姥島から移設されたという伝説がある。

⑥ 南湖仲町 八雲神社 南湖4-4-29

『新編相模国風土記稿』茅ヶ崎村の項に「天王社」とあるものが八雲神社と思われる。

資料館叢書4 山口金次調査録『茅ヶ崎歴史見てある記』（1978年市文化資料館刊）119頁に次のように記してある。

八雲神社の元は茶屋町の江戸屋の屋敷神だった。昔、浜降祭には浜之郷の鶴嶺八幡社の神輿を、浜之郷で担ぎ出し次に南湖で担ぎ、終わると浜之郷に戻して宮入していた。ある年、南湖からの返却が遅れて宮入できず浜之郷が怒った。江戸屋が中に入って詫びをいれ、自宅の天王社を仲町に移して祭り、仲町でも神輿を作った。そこで今も、仲町の役員が浜降祭の折に江戸屋に挨拶に赴くのだ。

社殿の彫刻 スサノオのオロチ退治

参考文献 茅ヶ崎市文化資料館『ちがさきの石仏』15号（2011年5月刊）所収の平野文明「オロチを退治する神と、種類不明の鳥の彫刻—南湖中町、八雲神社—」

境内の石仏など（『資料館叢書14『茅ヶ崎の石仏2茅ヶ崎地区』より）

双体道祖神(1) 嘉永4年(1851)

単体道祖神(2) 年銘不明

金神・風神 昭和9年(1934)

そのほかに、南湖麦打唄の碑（昭和62年）、松苗植樹記念碑（昭和54年）、戦没者慰霊碑（昭和37年）がある。（資料館叢書10『茅ヶ崎の記念碑』136~139頁に収録）

○茅ヶ崎村(智加佐岐牟良) 【雄山閣出版『新編相模国風土記稿』第三卷所収】

江戸より行程十四里許、戸数四百八十六、東西二十八町(東、小和田・菱沼・室田三村、西、矢畑・浜之郷・下町屋・松尾・柳島五村、北、高田・田蔵二村、南は海に至る)、元弘三年(一二三三)新田義貞、鎌倉を攻めし時、村内十間坂辺放火せし事、【太平記】に見え(曰、元弘三年五月十八日の卯の刻に、村岡・藤沢・片瀬・腰越・十間坂五十余ヶ所に火を懸けて、三方より寄せ懸たり)、また中前代蜂起の時、此処にて合戦ありし事、同書に見えたり(曰、始遠江の橋本より佐夜中山・江尻・高橋・箱根山・相模河・片瀬・腰越・十間坂、此等十七箇度の戦に平家二万余騎の兵共或は討れ、或は創を被れり)永正十六年(一五二三)北條早雲此地を箱根別当金剛王院に寄付せし事、同院蔵文書に見ゆ(曰、二百くわん文ちかさきと云々、其全文は同院の條に出す)、小田原北條分国の頃は北條幻庵、及座間某知行す〔役帳〕に幻庵御知行百三十貫七十一文、東郡茅崎又五十貫二百文、座間某と載す、今御料所にして文化十年(一八一三)、江川太郎左衛門英毅(ひでたけ)検地せし新田あり(当村も宝曆十二年(一七六二)より御料となる、古は岡部小左衛門・馬場三郎兵衛・酒井平左衛門・丸毛権之丞等知行す)、東海道村内を貫く(中程に二里塚あり)、又南方の海浜に砲術場係れり、此辺松露初茸を産し、又魚獵の利多し

○高札場 ○小名 △南湖(其地頗廣し、土俗南湖村と呼て別村の如し) △六本松(此地は鎌倉時世の刑罰場なりと云伝れど、地理如何あらん) △石神(朝鮮人来聘の時此地に茶店を置を例とす) △十間坂 △本村田 △高砂 △鳥井戸

○平島(比良之末)海上五町許にあり、南北四五町東西一町に過ぎず○乳母島(宇波詩之末)海上十二町許にあり、方一町(島の東少許を隔小嶋あり、正保元禄の国図に矢根嶋と記す、今其唱を失ふ)此辺より海苔・鹿尾菜(ひじき)等を産す、人家及樹林共になし○千ノ川 村の西北を流る、是を用水とす、柳島村界より海に入る、土橋を架す。

○八王子権現社 鎮守なり、慶安二年(一六四九)社領五石余の御朱印を賜ふ、傍に寮あり又鐘一口あり(元禄十五年(一七〇二)造る)、田蔵寺持、下同じ△末社 天王 ○乳母神(宇波加美)社 ○諏訪社 ○天王社 ○十羅刹女堂 ○第六天社 金剛院持 ○御霊社 義経の霊を祀る、木像を神体とす、西運寺持

○田蔵寺 茅崎山観音院と号す、古義真言宗(高野山末)本尊薬師を安ず、中興を善誉(文安二年(一四四五)寂す)と云ふ、元和八年(一六一六)僧清傳の時より法談所となれり、近郷十三箇寺の本山なり △天神社 △観音堂 ○金剛院 法林山と号す(前寺末)、僧文覚の創立する所と云ふ、本尊不動を置く △閻魔堂 ○海前寺 東松山と号す、曹洞宗(大庭村宗賢院末) 本尊地藏を安ず、開山元龍(慶長五年(一六〇〇)三月七日寂す)と云ふ △神明宮 △天神社 ○西運寺 御霊山淨祥院と号す、浄土宗(赤羽根西光寺末)本尊阿弥陀を置く、慶長元年(一五九六)僧念蒼草創して一寺とす(慶長十四年(一六〇九)四月十七日寂す)もとは庵室なり △観音堂

○柳島村(也奈木之萬牟良) 江戸より行程十五里、戸数七十五、御入国以来戸田五助が采地なり、東西八町余南北七町余、(東、松尾村、南、海に至る、北、下町屋・今宿・中島三村、西、相模川を隔て大住郡須賀村)流作場あり(小名浜川向河原にあり、五段四畝永銭を官に貢す) 此地相模川及諸流の落口に村落をなし、水田の用水も海潮を引て耕植を助け、水溢の患も箇より多し、其の地形新古相模川の二流、村の西を流れ、其間都て河原なり、また南方は海に面し、海岸は総て砂州にて其地に地頭林一所あり、洲嘴湊口に陟出せし所、眺望佳景多し、富士箱根大山近く聳る、南海は渺茫として天に連れり、かかる海濱の地なれば変革たびたびなり、昔は海濱地先に柳島石(利宇止世伎)と云大石ありて茅崎村南湖との界を標せしが今は砂中に埋れりと云ふ

○高礼場 ○小名 △上河原 △きたうじ △堀込 △小前川原 △南
崎 △いやの内 △濱川

○相模川 平常は新古二川分流し、中間に洲渚若干あり。須賀村に沿たる
川、今の相模川にして〈幅三十間〉、當村に沿たる流れは古相模川なり

〈幅五十間、此川上斜に北の村界より西の方迄中島村の界を廻れり〉、流
末は共に湊口に至りて海に入る。○堤 古相模川に傍いてあり〈長四百四
十六間、高さ九尺〉、元禄六年より官の修理となる〈組合四村、松尾・下
町屋・今宿及び當村なり〉。○仙ノ川 或は千ノ川とも書す。東より南を
流れて古相模川に落ち合へり〈幅十間餘、橋を架す。濱川橋と云〈長十
四間〉。○湊 村内にあり、近村の米穀皆此湊より出船す、四百石積の船
三艘、小船四艘を懸置き、運漕に便す。是、元禄四年五月隣郡須賀村と湊
争論に及び、官裁ありて當村廻船の事に預かると云ふ。

○十羅利女社 鎮守なり、善福寺持ち、以下同じ。△末社 稻荷 道祖神
不動 ○第六天社 ○山王社 ○稻荷社 ○神明宮一 ○辨天社 今廃
す、像は今、善福寺に安んず。

○善福寺 柳島山寶龜院と号す。古義真言宗〈茅ヶ崎村圓藏寺末〉本尊阿
弥陀、また不動・愛染・弘法の像を置く〈弘法の像は豆州般若院御影堂の
模刻にて自作の像を腹籠とす〉。開山快盛〈寛正二年四月五日寂す〉と云
ふ。境内に古碑二十基許建てり、皆壞損す。里正善左衛門が祖先の碑なり
と云ふ〈先祖は藤間徳右衛門と云ふ、何の頃か其宗家は断て善左衛門は支
流なり、先祖の法石に一白浄心と号するものあり、天正元年八月十二日死
す。是當村開闢の民にや〉。△金毘羅社 ○地藏院 慈光山彼岸王寺と
号す〈本寺前に同じ〉。本尊地藏又千手觀音正觀音を安ず。開山を賢乘
〈文安二年十月廿四日寂す〉と云ふ。肖像二軀あり、地頭戸田氏の像と伝
ふ、是致仕の後當寺に隱栖すと云ふ。年代名諱を伝へず。
○戸田氏陣屋蹟 今畑となる〈濶凡三段〉。